



| | |
|------------------------|---|
| Title | 「クラフト創造都市」金沢に関する研究：「工芸」の多義性を基軸として [論文内容及び審査の要旨] |
| Author(s) | 澤田, 拳志 |
| Citation | 北海道大学. 博士(観光学) 甲第13982号 |
| Issue Date | 2020-03-25 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/78331 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | theses (doctoral - abstract and summary of review) |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL. |
| File Information | Takashi_Sawada_abstract.pdf (論文内容の要旨) |



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：澤田 挙志

学位論文題名

「クラフト創造都市」金沢に関する研究

——「工芸」の多義性を基軸として

本論文の目的は、第一に金沢市の文化都市政策における理念と実態、そしてその背後にある矛盾や葛藤を批判的に検討し明らかにすること、第二に「クラフト創造都市」金沢の軸である「工芸」に注目し、批判的に検討を加え、現代において衰退傾向にあるといわれる「工芸」が、なぜ創造都市政策の軸として据えられたのか、そしてそれは金沢の文化都市政策においてどのような意味合いを持つのかを明らかにすることである。

本論文は全7章で構成される。第1章では、序論として研究の背景と目的、対象、研究の意義などを提示する。近年、文化や芸術を軸に都市の再生や活性化などを図ろうという動きが増加しているが、この動きは、近代以降に都市が追い求めてきた都市のあり方からの転換を意味するのか、未だ明らかであるとは言い難い。特に、創造都市と呼ばれる都市像が台頭してきており、様々な都市が創造都市を標榜した取り組みを行っているが、その実態には、世界的なイベントの誘致や新たな文化施設の建設により観光客誘致を狙う様子も見えるなど、「創造都市」というブランドの名の下に、文化や芸術を利用し都市の装いを変え、新たな都市間競争を繰り返している側面も窺え、必ずしも20世紀型の都市からの脱却が図れているとは言いきれず、改めてこれからの都市のあり方を問い直す時期に来ているのではないかと考える。そこで本研究では、ユネスコにより認められた「クラフト創造都市」であり、文化都市としての評価を確立している金沢市を分析対象とした。そして、本研究の意義として、金沢は日本の近代化がもたらしたしわ寄せや影の部分が典型的に現れた地方都市であり、そのような都市が文化都市としての顔を形成していく過程を明らかにすることは、近代化以降の日本の地方都市が様々な葛藤や矛盾を抱えながら、それぞれに独自の方向性を目指すあり方の一つの典型例を示すこと、また、様々な文化事象の中でも、産業としての成立が困難な「工芸」が多義的な地域資源として利用される実態を明らかにすることは、文化的、歴史的な資源を見直し観光振興につなげていこうとする、日本の諸地域で近年よく見られる取り組みの分析に向けた一つの事例を示すものになり得ることなどを挙げた。

第2章では、本研究の理論的背景及び分析の枠組みについて整理を行った。具体的には、都市史、文化政策、都市政策などに関する主要な論点を整理し、本研究が明らかにすべき点をより明確にした上で、金沢に関する既往研究を踏まえ、それらを接合し改めて課題の抽出を行った。そして本研究では、金沢市と「工芸」の歴史的変遷とを重ねながら、「文化」と「経済」、「保存」と「開発」、「作品」と「商品」のような対立する分析軸で金沢の文化都市政策に検討を加えることとした。

第3章では、金沢市における産業政策と文化政策の歴史を振り返り、その特徴を論じた。具体的には、金沢市が目指してきた都市像とその実態の間にある齟齬に着目し、「文化」と

「経済」、「保存」と「開発」といった異なる二つの側面から分析を行った。その結果として、金沢が他都市と同様に都市開発を目指しながら、「裏日本」という地政学的な理由などにより経済的な発展や開発が遅れたこと、一方で京都ほどの歴史性を有さず古都とは認められなかったことなど、紆余曲折を経た結果として、現在の「クラフト創造都市」の認定に辿りついたということを示した。

第4章では、「クラフト創造都市」金沢の軸である「工芸」について、その歴史的展開を整理し「工芸」が含む意味合い及び現在の「工芸」を取り巻く状況などを論じた。結果として、「工芸」は「美術」と「工業」の間で揺れながら、時には「美術」として、また時には「産業」として扱われる様子が窺えた。また、「工芸」概念の成立当初においても、日本政府が近代化を進める過程で「美術」の枠組みの外に位置付けられる一方で、海外からのまなざしでは美的価値を持つものとして評価を受けたが、そうした歴史を繰り返すように近年においても欧米を中心とするアート界から洗練されたものとして見出されるなど、「工芸」は「産業」「工業」「美術」などの矛盾する要素を潜在させており、その時々々の社会との関係においてそうした多義的な要素が顕在化するということが確認できた。

第5章では、「工芸」が持つ特徴と金沢市が進めてきた「工芸」に関連する施策を照らし合わせ検討を加えた。そして、「工芸」の歴史的変遷において見られたような近代化からの遅れといった意味合いや、「美術」と「工業」、「作品」と「商品」という異なる二つの方向性に向き合わざるを得ない特質などは、かつては日本の中心的な都市の一つでありながら、明治期以降は「裏日本」として位置付けられ、また戦後は非戦災都市として産業振興や都市開発が遅れる中で、せめて北陸の中では中心都市としてあり続けたいと思いつつも歴史都市としての個性も保つために「保存」と「開発」といった異なるベクトルに対峙しなければならないという金沢の持つ特徴と重なりと指摘した。

第6章では、それまでの議論を踏まえ金沢で実際に起きている事象を取り上げ、各章で示してきた点が「工芸」の作り手、市場、アート化といった側面でどのように顕在化し、金沢がそれらにどのように折り合いをつけようとしているのか、また、その一方でどのような課題を抱えているのかについて検討した。その結果として、それぞれの側面において、金沢が抱えてきた「文化」と「経済」、「伝統」と「革新」といった異なる二つの方向性に直面する様子が見られ、意見の相違やジレンマを抱えながらも、「工芸」の持つ多義性をその時々々の状況に合わせて使い分けることで対応しようとする姿が確認できた。

第7章は、結論として本論文で明らかになった点をまとめた。具体的には、文化都市の成功例として扱われる金沢の背後には、文化と経済の間で揺れ、数々の挫折を味わった経緯があり、また「工芸」は「経済発展」と「文化保全」を同時に追い求めてきた金沢において、大規模な産業化や工業化には向かないものの、歴史性や伝統性を残しつつ、かつ美術品的価値を創出する可能性を持ったものとみなされてきたが、「工芸」には矛盾する要素が内包されており、多義性をはらんだ「工芸」を軸に据えるがゆえに、現在の施策やその立案過程にも方向性の定まらない側面が引き継がれていること、加えて、既存の経済優先主義や産業発展の方向性では他都市に太刀打ちできない金沢にとって、創造都市政策はそれらの方向性とは異なる価値に期待をかけた生き残り戦略であり、安定した歴史文化や揺るぎのない都市としてのアイデンティティなどに基づいた確固とした都市政策と見なすのは困難であることを指摘した。また本研究では、様々な挫折を経験する中でアイデンティティが常に揺らぎながらも、文化都市として一定の評価を受ける金沢の都市政策の歴史的変遷を振り返ったが、その間に金沢が示してきたたかさや柔軟さは、地方都市が生き抜くために地域資源をどのように見直し価値づけることができるのかという一つのあり方を提示したものとみなすことができるのであり、そうした分析は、再創出された地域資源を呼び水とした観光振興の可能性を探るような観光研究とつながるものであると論じた。